



教職大学院 Newsletter No. 43

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2012.5.19

ローカルな知の生成にむけて

「授業研究を軸に据えた学校づくり」を支援する大学院への期待

東京大学大学院教育学研究科 藤江 康彦

学校現場で行われる授業研究には、子どもの学習や発達をよりよく支援する授業を追究するという目的はもちろんであるが、教育に関する専門家の学習コミュニティを校内に構築するという目的もある。

「授業研究を軸に据えた学校づくり」は、この、学校を子どもだけでなく教師も学び育つ場にしていくという志向をよりどころにして進められていく。しかし、実際にこの取り組みを進めていくことは難しい。学校コミュニティの小規模化や学校に求められる機能の肥大化などからくる教師の多忙化がその理由としては、まず想定されうる。

加えて、教師と、教育制度や政策、教育理論との関係性のあり方にその理由を見いだすことができるのではないかと。すなわち、教師個人の学習・熟達、制度や政策、理論の直接的な受容とみなされ、孤立した専門家としてそれらを実践化する、という垂直的で一方向的な関係性となっているということである。教師という職業が個業になりやすいということ、従来の「技術的熟達者」としての教師像の名残があるということ、などが理由として考えられる。

制度や政策、理論はそれが運用される具体的な学校においてはじめて実践化される。また、その実践化のありようは各学校の文化に応じて独自性をもつ。教師の知識や思考の様式の特徴にかんがみれば、制度や政策、理論が教師に深い理解を伴って学ばれ、実践的見識となるのは、それらが、学校といういわばローカルな文化のなかで再解釈され、社会的、歴史的、文化的資源と結びついて運用されるときである。つまり、教師の学習・熟達に向けて制度や政策、理論がローカルな知として再生成され運用、共有されることを通して、学校が、教師と制度や政策、理論とをつなぐ場として機能する必要がある。

学校がそのように機能するための要件とはどのようなものだろうか。

教師の学習・熟達を支える学校のあり方を考えるにあたり、学校は教師の「適応的熟達」を促す場である、という視点が有効であるように思われる。適応的熟達とは、新たな状況、不確実な状況において柔軟に対応していくことができる熟達のあり方で、決められた作業を手際よく進めることができる「定型的熟達」と対置される。

波多野と稲垣 (Hatano & Inagaki, 1992) は、適応的熟達の動機づけの基盤として、①絶えず新奇な問題に遭遇していること、②対話的相互作用に従事していること、③緊急な(切迫した)外的必要性から解放されていること、④理解を重視する集団に所属していること、を挙げた。教師の仕事においては、①教師の仕事は、常に新奇な問題に遭遇しており、適応的熟達への萌芽は職業に内包されている。教育改革のなかで未経験の実践上の課題に直面することで生じた違和感や当惑を解消するために、その問題構造や子どものおかれている状況について様々な角度から理解することができるような職場環境を

内容

- 巻頭言 (1)
- 教育改革の展開を吟味することの意味 (2)
- 4月の合同カンファレンスに参加して(3)
- スタッフ紹介 (6)
- 院生紹介 (7)
- 平成24年度免許更新制 (12)
- 書評 (14)
- 教育研究集会案内 (15)
- 6月ラウンドテーブル速報 (16)

保障する必要があるだろう。②生じた課題を同僚と対話的にやりとりしながら対処していくことが可能な同僚性が構築されていることが、問題状況への多面的理解を後押しするであろう。③他方で、教師が直面する課題には、緊急な外的必要性に基づき即応を要するものも非常に多い。そのことで生じた実践上の困難を教師が自らの能力に帰属するのではなく、熟達の過程では起こりうる問題として認識するような支援を通して自己効力感を高め、動機づけの低下を防ぐ必要がある。④結果的に、①～③を備えた集団が「理解を重視する集団」であるといえるだろう。こういった条件が学校の側にあった場合に、教師の熟達がうながされることが示唆される。ただし、現状としては、「定型的熟達」を遂げることが教師としての高い評価につながっていないだろうか。効率主義に走らずに、じっくりと子どもを理解し、問題解決を進めていくような学校づくりが必要である。不確定な問題状況と対話しながら、時に、知的初心者として課題と向き合い探究していく、革新性や創造性の発揮を保障することが、学校には求

められる。

ここに、福井大学教職大学院の存在意義がある。本大学院の特色である学校拠点方式は、教師経験者、教育行政経験者、研究者がチームとして学校に携わり、制度や理論をそれぞれの学校のローカルな文化に落とし込んで、実践化させ、教育の制度、政策、理論と個々の教師をつないでいく。とりわけ、昨今の教育改革は、ともすると教師には必要感が感じられないまま進展し、そのことが、不適応感や不全感をもたらし、結果として自己効力感の低下につながる場合もある。新しい教育政策や教育理論の意味を問い、自身の実践知やライフストーリーと関連づける作業を丁寧に行うことを通して、教師にとって受肉化された知となることを支援すること。日々の外的で緊急性の高い課題に対応することで疲弊している学校を外部から丁寧に再構成し、ローカルな知を生成していくこと。教育実践、学校教育の本来的なあり方もいえる、このような取り組みが福井から全国に広がることを期待したい。

教育改革の展開を吟味することの意味

教職大学院 津田 由起枝

春4月、学校では、ほとんどの子どもたちが新しい学年への進級に胸躍らせ、朝元気に登校し、クラスや学年の子どもたちとの輪の中で、授業を始め様々な教育活動、休み時間の話らい、部活動など、多くの場でのかかわりを通した喜怒哀楽のなかで、人としてぐんぐん成長していく姿を見せてくれます。そのなかで、疲れ切った顔つきで挨拶の声もなく、遅れて登校してくる子どもたちをチラホラ見かけます。朝からクラスの子どもたちとうまく溶け込めず、保健室や相談室の住人として多くの時間を過ごす子どもたち。この子たちにとって、学校や友だち、教員というのはどんな存在であるべきなのでしょう。新たな環境との出会いの中で、互いの存在意義を認め合え、励まし合って高まっていく場をどうしたら創り出すことができるのでしょうか。そしてどんな子どもたちにも夢や希望が広がる場をどうしたら仕組んでいくことができるのでしょうか。うつむき加減で登校してくる子どもたちの姿は、こうした問題を私たちに是非考えてくださいと訴えかけているように思います。

昨年度の東日本大震災後、様々な分野で、多くの人々を巻き込んで復興が論議され、少しずつ実践も生まれてきています。あまりにも巨大な喪失を経験した方たち—その方たちにとってどんなことが生きる支えになったか—という、「残された家族」や「地域の人

たち」、「関わってくれた人たち」との絆だと言います。そして、自然発生的に広がっていった人の輪の中で、希望の灯火が子どもたちの笑顔であり、若者たちの生き生き活躍する姿であると聴きます。「ともに生きる＝共生」という理念は、人が人らしく生きるために根源的なもの、それは、子どもも大人も超えた普遍的なものです。翻って考えてみると、学校はこれまで、それとは対極にある別の尺度で学校自身の存在意義を勝手に追い求めてきたのではないのでしょうか。今、学校でそれこそ、社会とともに生きることが求められているとしたら、何をさておいても学校ではこの「ともに生きる＝共生」を常に視野に入れた学びの展開が日常的に繰り広げられる必要があります。

学校とはまさに社会とか個の人生が凝縮された場所です。学ぶということを共通項として、いろんな人たちが、それぞれいろんな思いを胸にいろんなドラマを展開しながら集まっているところです。学校以外のどこかに、それだけの人やものが自然に集まって来ることはないですし、つながりも生まれにくいでしょう。それぞれの授業や諸活動の中で、学校だからこそできる学び、学校に集う人たちだからこそ生まれる学びが展開できるのではないのでしょうか。

私は学校の役割について次の3つを考えています。それは「自分育ちをするところ」、「違う育ちを受け

入れるところ」，そして「ともに育ち合うところ」です。一つひとつの教育活動をこのような目で見てみると，随分とらえ方が違ってきます。難しい計算で正しい答を出せたり，跳び箱が跳べたりすることは確かに大切な目標ではありますが，それができるまでに，どんな人たちとのやりとりやアドバイスのもらい合い，自身の試行錯誤があつて達成できたのでしょうか。またできるようになった後，そこで学んだことを生活の中で，他の人たちとともに，どんなふうに活かしていくことができるのでしょうか。つまり，一つのことができるようになる前と後の過程を教育的な場としてどれだけ意図的に仕組むことができるかで「自分育ち」，「違う育ちの受け入れ」，「育ち合う」ことが可能になると思います。他の子どもよりも先にできるようになった子どもも，上達の秘訣を語ることで自分ができたときには考えなかったもう一工夫を思いつくかも知れないし，できない子どもたちに分かるような話し方を工夫する必要性を感じるかも知れません。さらには，今まで経験したことのない学びにチャレンジする総合的な学習も増えてきています。これらの学習にあつては，「自分育ち」や「違う育ちを受け入れること」を抜きには考えられないし，「ともに育ち合う」場も当然生まれて来ます。そこにもっと学びの目を向けるべきなのではないでしょうか。何ができたかできなかったかという結果ばかりに注目するのではなく，前後の過程を考えることが重要です。教師が学校の意義を十分理解した上で，教育活動を仕組むことがこんなにも求められる時代はこれまでなかったと言えます。

今，世界は，知識が社会や経済の発展の源泉となる

知識基盤社会を迎えています。グローバル化や少子高齢化による社会の急激な変化，またそのことによる社会生活の低下，人間関係の希薄化，格差の再生産などといった課題が山積されています。このような時代に生きる人にふさわしい教育のあり方を見据えることは，今後の日本の進展に大きな影響を与えることでしょう。知識基盤社会に生きる子どもたちにとって欠くことのできない資質能力は何なのか，教師である我々は，果たしてそれを持ち得ているのか，急いでそれを考えてみなくてはならない時に来ています。

私自身の教員のライフステージを振り返ってみると，時代も助けてくれたのか，周囲の人たちの理解もあつて悩みながらも勢いで何でもできたように感じた20代，少しの経験で教師の仕事が分かったように感じていた30代，そして立場をもらって戸惑う40代。40代を迎えてから，学級の子どもの動かすのと異なり，多くの子どもたちや先生方とのバランスを常に考える必要に迫られました。この辺りから否が応でも教育とは何かを見つめ直す必要が出てきます。読んだこともない本を読んだり，他校の研究会にも参加したり何かきっかけとなるものに出会いたいという思いがふつふつと湧いてきます。研究主任や教務主任，学年主任といった「ミドルリーダー」と呼ばれ学校を動かす要になる立場になって，それが改めて実感されることでしょう。変動の激しい知識基盤社会に生き生きと活躍できる日本人を育成するために，学校段階で何を考え，どう取り組むべきなのか，様々な教育改革の資料を読み解く中で，そのヒントを見つけることができるのではないかと考えています。

4月の合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年／勝山南高等学校 堂森 峰春

4月21日，22日の両日，平成24年度最初の合同カンファレンスが開かれた。6階のコラボレーションホールに入ると，すでに何人かの院生の先生方が来られていた。「また一年始まるな」という感情と，「大学院入学から一年も経ってしまった」という焦りのような気持ちとが入り混じった，新学期特有の心地よい緊張感を感じた。

すっかり顔なじみになったスクールリーダーの先生方，教職専門性開発コースの若い院生の方々，少し緊張気味の今年入学された先生方が次第に集まってくる。昨年は，私自身もどんな二年間になるのかという見通しがもてず，非常に不安な気持ちでここにいたことを思い出す。しかし，その後のクロスセッションで

チューターだった玉木先生やグループの他の先生方から率直で温かい言葉をかけていただき，ここに来て自分を語ることの解放感，心地よさを感じることができたことが，その後の原動力となったことは間違いない。今年はその役割を自分が果たさなければいけないのだが。

ホールの入り口のテーブルにいつも置かれているクロスセッションのグループ分けの表を見ると，「去年とちがうな」という部分があった。高校に所属しているスクールリーダーの先生方が，同じグループの中に複数人いるということである。はじめてのクロスセッションで，同じグループで同じ校種の先生がメンバーとしていることはとても心強い。よく見ると，他のグ

グループについても同様の配慮がなされていたように思う。

クロスセッションが始まると、それぞれのメンバーから、これまでの自分の歩み、大切にしてきたことが語られる。はじめてお会いする先生方もいらっしやっただが、15分ほどの自己紹介を聴くうちに以前から知っていた先生のような気がしてくる。なによりも同じ教職大学院の院生という帰属感が一層そういう気持ちにさせる。

一日目は、自己紹介のあと、教育改革に関する資料を読みあって内容や感想を紹介し合った。昨年は5月の合同カンファレンスで行った内容である。短い時間の中で、一定の分量のある資料を読み込み、他の人に説明するのは簡単なことではない。私は、キャリア教育・職業教育についての資料を読んだが、十分に内容を吟味して紹介することはできなかった。

二日目は、長期実践研究報告を読む作業である。教職大学院では、じっくりと時間をとって書物や資料、報告を読む作業が何度かある。私はこの時間が好きだ。自分のペースで著者の語りをじっくりと聴く時間はとても贅沢な時間である。私は、昨年の4月の合同カンファレンスで同じグループとなり、その後も何度か報告を聴く機会があった、見崎洋之先生の学校づくり

についての報告を選んだ。新しい学校を創ろうとする先生の実践が、自分のめざすものと重なる部分が大いと感じていたからである。グループの他の先生方もそれぞれの思いで、多くの場合、自分の経験やこれから目指すものをイメージして、1冊の実践研究報告を選ばれたようだった。

グループを変えて本来の「クロス」セッションに入った。それぞれの報告から、指導案について、教師の子どもへの働きかけについて、子ども理解についてなどが話題になった。多様な立場から多様な意見が出てくるのが、クロスであることの醍醐味である。私が昨年経験したような、新しいメンバーへの配慮ができたかどうかは危ういが、私自身の報告については、「閉校を迎える1年きりだから思い切った実践ができるのではないか」、「生徒が誇りをもてる実践ができる」といった、普段の自分の考えを後押しするような感想をいただいた。

これから、この仲間たちと一緒に学んでいくのだという楽しさと、自分の研究実践をいよいよ本格的にしなければという「覚悟」のような感情とをずっと感じていた2日間であった気がする。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校 木子 泰宏

4月の21日、22日に合同カンファレンスが行われた。教職大学院に入学して最初の合同カンファレンスということで私は緊張していた。今までも木曜カンファレンス等で話し合う機会があったが、それはあくまでも教職専門性開発コースの同じ院生という立場の人同士の話し合いであり、現役の教師であるスクールリーダー養成コースの方々との話し合いは今回が初めてだった。緊張してうまく話せなかったらどうしよう、そんな不安が私の中にはあった。しかし、予想に反してグループでの話し合いは終始和やかに進み、私もほとんど緊張することなく話すことができた。ところどころ詰まってしまうこともあったが、どの先生方も真摯に私の話に耳を傾けてくれた。私の悩みに対して様々な視点からのアドバイスを頂くことができ、非常に参考になった。

私の悩みの一つに、算数の授業での課題設定はいつどの児童のレベルに合わせるべきなのか、というものがあった。クラスには算数が得意な児童もいれば、不得意な児童もいる。得意な児童に課題のレベルを合わせると、不得意な児童を完全に置き去りにしてしまう。不得意な児童に合わせて、得意な児童にとって退屈な授業となってしまう。中間に合わせるのが一番良いのかもしれないが、両方から不満が出てしまい中途半端な感じになってしまうのではないかと。主免実習で担当したクラスでこの問題に直面して以来、私はこの問題についてずっと考えてきた。副免実習等を通して、自分なりの答えを見つけることはできたが、先生方の意見を聞けば、新たな視点を得られるの

ではと考えた。

ある先生からは、色々な解法がある問題を課題として設定し、どんな解き方でも認めて子どもを評価すれば、どの子どもも満足するのではないかという意見を頂いた。これは私が考えていたものとほとんど同じだった。また、ある先生からは、授業は不得意な児童に合わせて課題を設定し、得意な児童に対してはあらかじめ用意しておいた難しいプリントを配布すれば良いという意見を頂いた。

今回の話し合いを通して先生方と意見が同じだったことで、自分の考えは間違っていないという確信を持つことができた。また、なるほどこんな考え方もあるのか、と今までの自分が思いつかなかったような新たな考えを得ることもできた。先生一人一人が違う考えをもっており、こういった色々な人からのアドバイスを得ることができるからこそ、合同カンファレンスのメリットではないかと考えた。

2日間を通して強く感じたことは、どの先生方も実践記録などをまとめるのがうまく話も非常にわかりやすいという点である。特に、実践記録をまとめる点に関して差を感じた。同様に、M2の先輩のレポートも非常にわかりやすくまとめられていた。今はまだまだ未熟で拙いレポートしか書けないが、この1年間で数をこなして、1年後の合同カンファレンスで、後輩からこの先輩のレポートは素晴らしいと思ってもらえる様なレポートを書けるようになりたい。

スクールリーダー養成コース1年／福井東養護学校月見分校 徳丸 郁子

教職大学院の卒業生より「聴くこと、語ること、まとめることが苦手だと苦労する」と言われ、今年4月、不安な気持ちでいっぱいになりながら、教職大学院の学生として一步を踏み出しました。その一方で、これまで積み重ねてきた経験や校種の違い、いろいろな立場の院生からの語りや意見を聴くことで、私自身を見つめ直す機会になるのはもちろんのことながら、これまでとは違う新しい視点から勤務校での実践をとらえ、さらに新しい実践へと広げていけるのではないかと期待する気持ちも交錯していました。

そんな複雑な気持ちの中、初めて参加した合同カンファレンスでは、大学の先生方や院生の自信と活気にあふれた議論に緊張と焦りを感じずにはられませんでしたが、目の前の子ども達について必死で考えながら、日々実践している姿や現場で悩みながら乗り越えていこうとする気持ちは、私も同じだと思い、前向きな気持ちをもって参加しようと決意を新たにしました。

1日目の午前中は、「実践的な自己紹介」ということで、『3つの種』を中心に自己紹介をしました。現職の先生からは、これまで積み重ねてきた経験や現在の立場、そして未来への展望といった話を聴かせてもらいました。共感する部分が多々あったことはいまでもありませんが、レジュメ1枚にこれらのことが凝縮されており、それを語ることで、その先生の思いやこれまで歩んでこられた道、実践が大きく広がりをもって見えるようで、まぶしく感じられました。

あくまでもレジュメは補助的なものにすぎず、『3つの種』をぶつ切りにせずに、自分の考えをまとめる作業の中で〈過去・現在・未来〉が整理されてきて、つながりが自然に生まれた語りになったのではないかと感じました。その一方で、用意してきたレジュメをただ読むだけに終わってしまった自分の拙さをただただ思い知らされましたが、その内容について「慌てない」、「やらされ感をもたせない」というアドバイスをもらい、焦っていた自分と同僚に無理矢理させているかもしれない自分に気づかされ、はっとした気持ちになりました。

2日目は、長期実践研究報告を読み、実践者の展開について読み取るだけでなく、実践者としての成長、そしてその成長を支える要因と課題、そこから今の自分の実践についても触れるという活動を行いました。

私は、実際の自分の経験から、チームで行うことの重要性や効果を感じていました。しかし、私自身はどうかという、話し合いの場を持つことやすべてを伝

えなくてはいけない億劫さ、そして、自分が意識せずに当たり前に行ってきたことをうまく同僚に伝えられないもどかしさ等の理由から、「一人でやった方が早い」という思いで、すべてを自分でやってしまうところがありました。その点から、「協働」、「同僚性」、「相互交流」が私自身の課題であると思いました。

そこで、私が選んだ長期実践研究報告は、『教師が学び合い成長する学校をめざして』（学校改革実践研究報告No. 131 坂下博行 著）でした。ここでも「一人ひとりの教師が負担感ややらされ感を持たずに、前向きに取り組もうとしないと、研究や実践は長続きしない」という一文があり、1日目の自己紹介でのアドバイスが思い出されました。著者は「まじめな雑談」、「気軽にまじめな話し合い」をコンセプトに、少人数のワークショップ型の話し合いの場や授業研究会を行ったり、同僚とともに集団内で話し合いや学び合いの場をもったりしていました（その後のクロスセッションで「ストレス発散ができるような研究会」という言葉があり、なるほど納得）。私は、そのことが「学びある教師集団」、「教師が協働することの価値を感じる」といった成長を支える要因の1つになったのではないかと考えました。そのことから、私の独りよがりな行動は、子どもや同僚が新しい視点や刺激を生み出したり、自分たちの力で能動的に学び、自分たちの力で答えをみつけたりすることを阻害しているのではないかとすら感じられました。

この2日間、長期実践研究報告を読んだり、クロスセッションでの客観的な意見を語り合ったりして、現職の教員という立場から、そして私個人という立場からいろいろなことを感じました。意識せずにこれまで当たり前に行ってきたこと、これから取り組んでいこうと考えていることについて、改めて周囲の同僚にわかってもらえるように丁寧に語り、それに対して焦らずに幅広く意見を聴きながら、多面的・多角的な新しい視点から見た実践や学びに広げていきたい。そして、自分も持っている感性を大切にしながら、自分のありのままの言葉で、感じたことを丁寧に語っていきようになりたいと思いました。

膨大な資料を読み取って、レジュメにまとめて、それを読むだけで精一杯で、まだまだ「語り合い」の本質には近づいていませんが、ここでの学びをできるだけたくさん吸収し、一層、学校現場での実践に取り組んでいきたいです。

教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 北條 哲理

大学院2年になり、昨年1年間の経験を経て、今年度初めての合同カンファレンスに参加しました。昨年のこの時期には、右も左も分からず、とにかく提示された課題に取り組んでいたように思います。今回の合同

カンファレンスの中で、昨年1年間の色々な経験や、学びをしたことにより、さらに多くのことを学ぶことが出来たのではないかと感じています。ここでは、今回の合同カンファレンスを踏まえて、考えたことを書こ

とで、振り返りとしてしたいと思います。

今回の合同カンファレンスで、スクールリーダーの先生方のお話を聞かせていただいた中で、「学校を変える」ということのむずかしさを改めて考えさせられました。カンファレンスのクロスセッションで、ある先生のお話の中で学校現場を改革していくために現在、新しい研究に取り組もうとしているということをお聞きしました。そして、そのために研究部で色々な取り組みをしようと試みていること、他の先生方との意欲のギャップなどについてのお話をお聞きし、それぞれの学校で、どのように研究部会の持ち方をし、研究テーマを決めているのかということについて語り合うことになりました。

私は、現在、福井大学教育地域科学部附属特別支援学校（以下、附属特別支援学校）でインターンシップをさせていただいていますが、改めて研究校であることの強みということについても考えさせられました。附属特別支援学校では、昨年度で40周年を迎えたということもあり、今年度の研究テーマを決めるにあたり、早急にテーマを決めるのではなく、今までを振り返り、時間をかけて新しい研究テーマを探ることを行っています。そして、4月の全体研究会では、先生方が全員、「これまでの研究についての思い」、「附属

特別支援学校として大切にしていること」、「今年度研究していきたいこと」について付箋に意見を書き、それを小グループに分かれクロスセッションを行っていました。こうすることで、先生方一人一人の思いを共有し、研究部の先生方が受け止めることで、研究について、学校全体で、より深めていけるのではないかと思います。

このような研究会のあり方、学校改革のあり方は「附属のような研究校だから出来る」と言われてしまえばそれまでですが、しかし、私は今回のカンファレンスを通して、学校を変えることは不可能ではないのだと思いました。必ず新しい学校に改革するという意思をもって取り組んでいくことが大切なのだと感じました。そして、現職のスクールリーダーの先生方の「学校を変えたい」という熱い思いをお聞きすることで、私達も将来現場の教員の一人となり、学校運営に携わるようになった際に、その姿勢を見習うことが大切だと感じさせられます。そして、私達も「自分から学校を変えたい」という思いをもち、実践をしていくことが大切なのだと思いました。そのためにも、今年1年間で、インターンシップや、カンファレンスなどを通して、多くのことを吸収して、自分のものにしていきたいです。

Staff 紹介

松木 健一 まつき けんいち

組織の成長と子どもの発達は、よく似ていると感じるこの頃です。両者はある段階から急激に成長し、気づくと、手元から離れてしっかりと自立しているのです。寺岡英男副学長から教職開発専攻の専攻長をバトンされ、3年になります。無我夢中で必死の、そして、怒涛の3年間でした。とりわけ対外的には慌ただしい日々でした。福井の教職大学院の取組が認知され、学校拠点方式ということばが、少しずつではありますが説明なしに通用するようになりました。

教員免許状の改定を論議する中教審の「教員の資質能力向上特別部会」から答申が出されようとしています。その中で福井大学の取組が例示されています。知識基盤社会を支える教育改革を実現していくための教師教育改革は、教員個人の研鑽システムでは実現不可能です。教師は他の専門職

と違って、組織人であるからです。教師の自己改革と組織改革と授業づくりが一体となって取り組ま



れるシステムでなければ、改革が空転してしまうことが、漸く、理解されるようになってきました。その認知が深まった分だけ、福井の果たす役割は、これから一層大きくなる気配です。

ところで、今は単身赴任の父親が家庭に戻った気分です。教職大学院のスタッフ全員が力強く、そして生き活きと活動しています。このままでは自分の居場所がなくなってしまう。どうやら仕事と生活は重なり合うもののようなのです。奮起一転まき直しの初夏です。

院 生 紹 介

月澤 光恵 つきざわ みつえ

福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学した月澤光恵です。専門は数学です。4月から至民中学校でインターンシップをさせていただいています。私は学部生時代、龍谷大学の理工学部にて在籍していました。そこでは数学とプログラミングの勉強をしていました。学部生時代にどうしても解決しなかった個人的な問題があります。それは、「どうして数学を勉強しなくてはいけないのか」という問題です。おそらく教師になった場合に高い確率で質問される問題であると思われます。よく、「論理性を身に付けるため」といいますが、そのようなことで全員が納得できたら、皆が疑問に思う事はないと考えていました。私は、「論より証拠」であるなど考えました。目に見える身近な現象を数学的に解析できたら納得するのではないかと考え、学部生時代に勉強をしてきました。おかげで自分は納得することができました。いつか中学生にも理解ができるように説明してあげられたらなと思っています。

私が教員になりたいと本気で考えるようになったきっかけは、教育実習です。教育実習の指導教員の年齢がたまたま近く、今抱えている悩みや教育実習生だった頃の奮闘記などを話してくださいました。特に心に残っていることは、私が自分に自信が無く、注意ができなくて悩んでいた時にかけてくださった担当教諭の言葉です。「教師が生徒に本気で向き合えば、生徒もちゃんと向き合ってくれる。もしも教師が生徒と向き合うことを避けたり、自分の中で迷いや戸惑いがあったりすると、生徒もそれを察するよ」と話してくださいました。それまで私は「3週間程度しかいない自分が、注意なんてできる立場なのだろうか」と考えていました。今になって考えてみれば、その気持ちが生徒に気づかれていたのかもしれないなど反省しました。私もなにごとにも本気で向き合おうと思いました。その結果、注意することによって生徒が間違いを正してくれるのであるならば、私は一人の教師として注意しなくてはならないという気持ちになり、少しずつではありますが、注意できるようになりました。

またどんな生徒にも良い所があり、それを見つけてあげたいという教師の気持ちを教えてもらいました。最初は、やんちゃな生徒の良いところなど見つけるこ

とができるのだろうかと思っていました。しかし、3週間という短い期間だったにも関わらず教育実習で生徒のいい所がどんどん見えてきました。やんちゃな生徒は、実は率先して重い荷物を持つやさしい生徒であると気づいたときがありました、私は外見だけで生徒のことを見てしまっていたのだなと反省してしまいました。それと同時に、生徒が大切な存在になっていきましたし、本当に良いところはとことん褒めてあげたいと思うようになりました。このような気持ちになったことは初めての経験で、生徒は今後どのように成長していくのかを見守りたくなくなってしまい、教師になろうと思いました。

そんな私が福井大学の教職大学院に進学しようと考えた理由は、長期インターンシップがあり、現役の教員の生の声を聴くことが出来ると考えたからです。今の自分に一番足りないことは実践経験であると考えています。パソコンスクールの講師を少しやったことがある程度で、誰かに勉強を教えたことがありません。教育実習では44時間も授業を任せただけでしたが、授業を行うことだけで限界を感じる毎日でした。次の授業のことが気がかりで、限られた生徒とだけしか関わることができなかったことを本当に後悔していました。生徒と関わることができる唯一の時間である昼休みに指導案作成をするような行動をとってしまったことにも後悔しています。実習期間中、私は振り返る余裕を持ち合わせていなかったのだらうと思います。おそらくこのままでは、授業を改善するどころか振り返ることすらできない人間になってしまうと思い、長期インターンシップで少しでも振り返る余裕を持つことができればいいなと考えています。

現在、長期インターンシップをさせていただいて1週間が経ちました。至民中学校は教科センター方式を採用している学校です。そして、クラスター制の学校で小さな学校がたくさんあるような雰囲気のある学校です。正直、福井県で育っていない私は戸惑っている状態



す。しかし生徒たちは自主性があり、各クラスターの先輩が後輩を引っ張っているという話を聞きました。胸を張って社会に出ることができる生徒をそだてることができる環境に身を置くことができることをうれしく思い、日々勉強していきたくと思います。また、先

生方は熱心でおもしろい方ばかりです。良いなと思うところをどんどん盗んでいき、自分の夢である教師になりたいと思っています。いろいろご迷惑をおかけするかもしれませんが、2年間よろしくお願い致します。

堀江 沙也香 ほりえ さやか

はじめまして。今年度、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻のストレートマスターとして入学しました。堀江沙也香です。私の専門は特別支教育です。この4月から、福井大学教育地域科学部附属特別支援学校の小学部1組で長期インターンシップをさせていただくことになりました。念願であった小学部での長期インターンシップを行うことができるということで、とても嬉しく思っています。新しい出会いと学びのスタートに緊張と期待が入り混じっておりますが、これから気を引き締めて2年間頑張り続けようと思います。

私は、小学校の特別支援学級の教師になりたいという思いを抱き、福井大学に入学しました。きっかけは、私が小学生だったころの経験が関係していると思います。私は、小学2年生の時に、転校先の学校で初めて特別支援学級の存在を知りました。その教室は自分の教室よりも広く、トランポリンやキャラクターのテント、絵本や遊具がたくさんありました。不思議に思ってその教室をのぞいていると、私よりも小さな女の子が「一緒に遊ぼう！」と手を引っ張りました。それが「なかよし学級」との出会いでした。突然の誘いに驚きましたが、それから朝の会が始まるまでの時間になかよし学級に出入りすることが多くなりました。しばらく経つと、なかよし学級には異なる学年の子どもと一緒に勉強していることを知りました。そして、言葉話を話さない子どもや話がうまく伝わらないお姉さんがいることにも気づきました。当時の私にとって「なかよし学級」とそこに在籍する子どもたちは不思議な存在で、しばらく経つと自分と彼女たちとの違いというものを感じ始めるようになりました。この出会いや経験の中で、私は特別支援学級に興味を持ち、同時にその学級に在籍するような子どもたちと深く関わる仕事がしたいと思うようになりました。

そして、私は、学部生時代に探求ネットワーク・ライフパートナー・自閉症児を対象とした療育教室の学生スタッフなどを経験してきました。それらの活動を通して、さまざまな子どもたちとの出会いがありました。高機能自閉症の子どもとの出会いから、私は彼らと関わる難しさと楽しさを知りました。4年間を通し

て、一人の子どもとじっくりとかかわる機会を持たせていただき、子どもとの信頼関係を一番大切にしながら



活動してきました。さらに、私は学部の3年生のとき、附属特別支援学校で教育実習を行わせていただきました。それは、探求ネットワークでの「パートナー」ではなく、療育教室やその他ボランティア活動での「おねえさん」でもない。私が初めて「堀江先生」と呼ばれた4週間でした。何と言っても、すべての子どもたちの想像以上の可愛さに毎日気持ちが舞い上がっていました。

そんな子どもたちからは、本当に多くのことを学ばせていただきました。子どもが楽しいと感じるだけの活動ではなく、子どもたちが成長していくための授業づくりとは何なのか……。子どもたちの捉え方や自分の考え方は正しいのだろうか……。日々、自問自答しながらも納得した答えが出せず、悩み続けました。それらすべてが私のこれからの課題となり、学びの糧となったと感じています。実習期間は、毎日が新しい発見と戸惑いの連続で、指導して下さった先生方に助けていただきながらあつという間の日々でした。その後、小学校、中学校とそれぞれ通常学級で2週間ずつの教育実習をさせていただきました。その中には、特別な配慮が必要な子どもたちもいました。集団の中にいる子どもたちを指導する難しさを痛切に感じました。集団の中にいる子どもへの個別の対応、その子どもを集団の中で成長させるための手立てなど学びたいと考えるようになりました。そして、私は自分の学びの原点である特別支援教育の現場で、実践的な経験の中で学びたいと思い、長期インターンシップを行うことができる教職大学院への進学を決意しました。これからの2年間は、私にとって大きなチャンスであり挑戦であると考えています。子どもに寄り添い、信頼関係を大切に作る姿勢は忘れず、子ども本来の姿を捉

える力を身につけたいと思います。また、自身の実践を省察するにあたり、先生方のご指導、助言をいただきながら自分自身を教師として自信を持てるように成長していきたいと思っています。また、子どもにたくさんの

笑顔を与える教師になるために先生方からあらゆる技術を学び取って、日々前へ進んでいこうと思います。これからよろしくお願ひいたします。

孫野 貴之 まごの たかゆき

今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学しました孫野貴之です。専門教科は保健体育です。これから1年間、母校でもある美浜中学校にて長期インターンシップをさせていただくことになりました。

私は、岡山の環太平洋大学からこの教職大学院に入学しました。大学時代は、学校支援ボランティアに参加し、別室登校児童への支援に務めてきました。ボランティアでは、何らかの複雑な気持ちを抱え、教室に入ることが難しい5人の児童と学校生活をともにしてきました。ここでは、児童の言動や行動から気持ちを読み取り指導を行う難しさを痛感しました。感情の起伏が激しい児童たちに「どのようにすれば嫌いな勉強に自ら取り組むことができるのだろうか?」、「どのようにすればケンカをすることなく、みんなで協力して清掃活動を行うことができるのだろうか?」など、児童を指導する中で多くの課題に直面しました。

今回、長期インターンシップをさせていただく場は中学校となり、発達段階の違いから思春期特有の不安や悩みを抱えた生徒への指導となります。しかし、学校支援ボランティアを通じて見つけることのできた多くの課題を無駄にすることなく、中学校でも生徒の目線に立ち、生徒の気持ちを汲み取りながらきめ細かい指導が行える教師を目指していきたいと思っています。

また、教育実習では、公立小学校に4週間、公立中学校に4週間の実習をさせていただきました。公立中学校での実習は、陸上競技・リレーの指導を担当させていただきました。小学校の実習においても体育の授業を担当させてもらっていたので、自信をもって臨むリレーの授業でしたが挫折の連続でした。特に、生徒にスムーズに指示を通すための環境づくりや指示の出し方については、毎回の授業で反省すべき点があつきました。自分では生徒にわかりやすい指示を出したつもりでも、正しい指示の内容が生徒に伝わっておらず、生徒が行動できない場面がありました。保健体育の教員として、生徒に伝わる正確な指示を出すことが授業を展開するうえで非常に重要なポイントとなってくると思います。長期インターンシップでは、生徒にスムーズに指示を通すための環境づくりや指示の出し方の工夫を図り、より多くの生徒が、のびのびと楽しく体育の授業を行えるようにしていきたいと思ひ

す。

さらに、公立中学校の実習では放課後毎日、指導教諭の先生と生徒の帰った教室に残り、机の整備や落ちて



いるゴミの清掃を行いました。何気ないことかもしれませんが学級経営を行ううえで非常に大切なことではないかと感じました。長期インターンシップでも、放課後の教室の環境整備を継続していきたいと思ひます。また、このことが生徒の心に響き、生徒を巻き込んだ教室の環境整備となっていければ幸いです。そして先ほど挙げた、放課後の環境整備だけではなく、クラスの仲間づくり・雰囲気づくりにも積極的に参加して生徒の皆さんが居心地の良い安心できる学級づくりを学級担任の先生と一緒に取り組んでいきたいと思ひます。

これまで、学校支援ボランティアや教育実習を経験する中で、自分自身に多くの課題が見つかったと思ひます。教職大学院では、このような実践を通じて生まれる課題をカンファレンスやラウンドテーブルを通じて多くの方々と共有し、課題解決に向けて様々な角度から意見を求めていきたいと思ひます。そして、今までの自分では見ることのできなかつた視点から物事を捉えることのできる視野の広い教員になりたいと思ひます。また、何より長期インターンシップでは、学校の動きや生徒の成長を長いスパンをかけて見ることができます。短期間の教育実習では経験することのできなかつた、教育現場での様々な取り組みに、体と心の両方を使いながら体感していきたいと思ひます。また、学習指導だけでなく、生活指導・生徒指導・部活動の指導にも積極的に挑戦し、より多くのことを吸収していきたいと思ひます。先月からインターンシップが始まり、まだまだ学校の雰囲気になれることに精一杯ですが、いつも笑顔で温かい美浜中学校の先生方のご指導、助言をいただきながら自分自身を教師としても人としても成長させていきたいと思ひます。これから2年間、よろしくお願ひいたします。

長谷川 恵亮 はせがわ けいすけ

はじめまして。福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学した長谷川恵亮です。生まれや育ちは福井ですが、大学の4年間は名古屋で過ごしましたので、福井は若干懐かしい感じがしないでもないです。とにかく福井大学は初めてなので、この新しい環境になるべく順応し、新しい学びを見つけていきたいと思えます。以下では、私がこの教職大学院入学に至った経緯を書きたいと思えます。

まず、私が教育に関心を持つようになったのは高校3年の秋ごろ、本格的に受験勉強を始めたころです。その頃、私は大学入試、特にセンター試験に対し大いに疑問を抱いていました。ただ受験勉強するのが嫌だったというのもありますが、運の要素が大きいマーク式のセンター試験の結果が（今後の人生を大きく左右するであろう）大学選択の指標になるのはいかななものかと思ったのです。また、私が通っていた高校が進学校で、授業が受験対策の色彩の強いものであったことも大学入試に疑問を抱く一つの要因になっていたと思えます。受験があるから授業がつまらんのではないか、日本の受験形態を何とかするにはどうすればいいのかと、そんなことを考えていました。しかし、このころは心理学にも興味があり、カウンセラーになりたいと思っていたので、心理学コースと教育学コースのある名古屋大学教育学部を受験することにしました（落ちました）。

その後、1年間の浪人生活を経てなんとか志望校に入学することができました。大学では臨床心理士の資格を取るために心理学コースに進んだのですが、いろいろあって臨床心理士はあきらめました。代わりに、さまざまな講義を受ける中で、時代の変化と共に子どもも変わってきたこと、それに伴い今まで見えにくくなっていた学校の問題が次第に表面化してきたこと、そして学校や教師に求められるものが変わってきたことなどを知り、学校教育に興味を持つようになりました。そして、もともと学校が好きだということもあり、教師として現場で学校教育に携わりたいと考えるようになりました。単純に言えば「教師っておもしろそう！」と思ったのです。

しかし、自分が教師を目指すにあたっていくつか問題がありました。まず、大学では中学社会と高校公民の免許しか取れなかったことです。いや、社会科の免許が取れてしまったことと言ったほうがいいのかも知れません。名古屋大学教育学部ではカリキュラム上、社会科の免許しか取得することができず（頑張れば他学部の講義を受けることで他の教科の免許を取得することもできたのですが頑張れませんでした）、それも教育学部の単位の読み換えという形であったため、私は社会科の専門知識がほとんどありません。そもそも私は社会科が苦手で、さらに高校のとき世界史未履修問題にも引っかかっており、世界史もろくに勉強したこ

とのない自分が社会科を教えられるとは到底思えません。次に、教育現場での実践経験に乏しいことです。教育実践と言え



ば中学校での3週間の教育実習くらいです。教育実習ではさまざまなことを学ばせていただきましたが、自分の力量不足、認識不足を痛感し、まだまだ勉強しなければならないと感じました。最後に、教師とは何たるかという自分の教師像が確立していないこと、そして、そもそも学校とはどうあるべきなのか、教育とは何なのかといった、教育の本質を見出せていないことです。総じて、自分が教師として仕事ができるレベルに達していないことが問題でした。それでどうしようかと悩んでいる時に、長期インターンシップがあるという福井大学教職大学院の噂を耳にしたというわけです。以下に、私が教職大学院で学び深めていきたいことを挙げます。

- ・長期インターンシップを通して教師の仕事の総体を学ぶ。
 - ・学校の果たすべき役割とは。これからの学校の在り方を探る。
 - ・学校の授業とは何なのか。学校の授業で生徒が学ぶべきものを探る。
 - ・社会科とは何なのか。社会科の授業で生徒が身につけるべきものは何なのか。それを達成するための授業づくりを研究し、また、その授業を実施するために必要な教師としての力量を身につける。
 - ・生徒との関わり方。教師と生徒の適切な距離感を探る。
 - ・部活動（野球）の指導。競技そのものの指導だけではなく、部活動を通して生徒が人間の成長を遂げられるような指導とそのための集団づくりに貢献する。
- たくさんありますが、2年間でできるだけ多くのことを学びたいと思えます。

4月から、丸岡南中学校でインターンシップをさせていただきます。教科センター方式、スクエア制、ランチルームなど、私にとって新鮮な刺激の多い学校でインターンできることにとても感謝しています。丸岡南中学校の一員として学校に貢献できるよう頑張りたいと思えます。

ここまで私の文章を読んでくださった方には、私がおどのような人間なのかだいたいわかっていただけたかと思えます。ご察しの通り、多々ご迷惑をかけることとなりますが、これから私に関わってくださる皆様、どうぞよろしくお願いたします。

北村 元輝 きたむら げんき

はじめまして、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻に本年度入学いたしました、北村元輝と申します。これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。

私が本研究科に進学しようと決めた理由について少しだけ紹介させていただきます。私は昨年度まで福井大教育地域科学部学校教育課程社会系教育コースに在学していました。福井大学在学中は社会科の専門的知識（日本史・東洋史・地理など）よりも、社会科教育法を専門として勉強していました。卒業論文での研究テーマは「中学校社会科における言語活動の充実に資する社会科授業の研究」でした。「児童生徒とコミュニケーションのとれた教員になりたい」と考え、この研究テーマに取り組みました。しかし、「言語活動の中心となる児童生徒とのかかわりを学部時代の学びの中でどの程度持つことができたでしょうか」と卒業論文が進むにつれて考えるようになりました。そうした思いで私の学部時代を振り返ってみますと、実際に児童生徒とかかわる活動や学びは、探求ネットワーク活動、ライフパートナー活動、そして2回の教育実習だけでした。探求ネットワーク活動は3年間継続して取り組んだことで、私が子どもたちとかかわる際のひとつの土台として今でもしっかりと位置づけられています。しかし、ライフパートナー活動、2回の教育実習において何か自分なりの学びがあったのかと振り返ると、何を学んだのかさえ分からない状態でした。つまり私の学びがまだまだ漠然としたものでしかなく、探求ネットワーク活動を含めた個々の経験がつながり合っていない状態であることに気付きました。学部卒業を間近にして自身の経験や学び、それぞれがつながり合い、自分の中で意味のあるものになりたいと考えるようになりました。そこで教職大学院に進学し、インターンシップやカンファレンスなどを通し、これまでの私自身の経験と教職大学院での学びをつなぎ合わせていきたいと考えました。そうすることで2年後に私の中での教育観や教師像を確立していきたいと考えております。

現在、私は福井大学教育地域科学部附属小学校で週3日間のインターンシップを行わせていただいております。学部時代における小学校での教育実習は2週間しかなく、子どもたちと毎日遊びまわった、あるいは慣れない専門としない教科の授業に四苦八苦したという記憶しかありません。そのため附属小学校でのインターンシップが決まったときは不安しかなく、またこれからの2年間での学びが非常に浅いものになるのではないかと感じていました。それは私の学部時代の経験と教職大学院での学びをつなぎ合わせたいと考えた私にとって、学部時代の小学校での経験、小学生との経験が非常に乏しいため、そのように感じていたのではな

いかと思います。しかしインターンシップが始まり、まもなく1ヶ月が経過します。この1ヶ月間の経験はこれまでの私の考えや思い込みを大きく変えるものになっています。「子どもはこんなに考えている」、「先生方はこんなに思いがあってこの発言をしている」など、子どもたち・先生方にいい意味で予想を大きく覆される毎日です。そんな毎日に非常にやりがいを感じています。「子どもたちがどのような成長をしていくのか」、「今どのような学びをしているのか」、「先生方はどう子どもたちを支援しているのか」など、現場に入ってみたいと思うことが多く、インターンシップの一日一日が非常に濃いものになっています。

「なぜ北村君は教員の魅力は何だと思えますか」と教員採用試験の面接練習で聞かれたことがあります。その時は、「子どもたちを育てていくことに非常に魅力を感じています」と深い意味も、そして思いもないことしか答えられませんでした。しかし、今は「子どもたちと一緒に私自身も成長できること」、それこそが教員として子どもとかかわっていくことの魅力ではないかと考えるようになりました。そう考えることで、毎日違った表情・姿を見せる子どもたちと一緒に学んで、成長していける教員になっていきたいと考えております。けれども、これも今の私の考えで、この思いがこれからどう変わっていくのか、あるいはさらに確かなものになっていくのか、私自身が一番自分に期待しているように思います。

これから2年間の本学科での学びは、附属小学校の先生方や本研究科の院生・先生方と積極的に交流することで、「即戦力としての教員」を目指し、教員の専門性・実践力を習得していきたいと思えます。まだまだ至らない点や分からないことも多いですが、本研究科での2年間は日頃から大事にしている「前にしか道はない」、「何からも誰からも学ぶことはある」という姿勢で取り組んでいきたいと考えております。2年間どうぞよろしくお願いいたします。



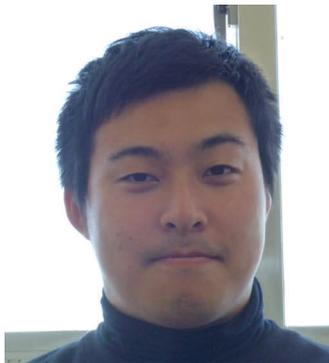
齋藤 宏 さいとう ひろし

今年度教職専門性開発コースに入学しました齋藤宏です。担当教科は社会科です。4月から坂井市立丸岡南中学校でインターンシップをさせて頂くこととなりました。丸岡南中学校では、「教科センター方式」や「スクエア制」、「独り立ち清掃」といった画期的かつ新鮮な取り組みが多く、これからの新しい学校としてふさわしい学校となっています。このような学校で長期にわたるインターンシップを行えることを心から楽しんでます。学校と職員全員が丸一となって生徒の成長・教育をサポートする体制は従来の「進路のことは～先生に」や「生徒指導は～先生へ」というような分業ではなく、それこそ一人一人の職員が全員の生徒とかかわり合い考える、そのような一体感のある学校です。

私は小学校時代に社会のテストで先生に褒められたことがきっかけで、社会科が大好きになりました。『好きこそ物の上手なれ』ということわざにもありますが、できるからこそ好きになったという感じは強く残っていて、大学時代はこの得意で、大好きだった歴史を全力で研究する4年間でした。その過程では生の一次史料を多く見ることができ、それについて考える「何故このような文章があるのだろうか」や「何故この史料はこの場所にあるのだろうか」といった歴史研究の根本に携わることができました。学部時代はこの歴史一本で研究を行ってききましたが、卒業を目前に控えた2月に「果たして自分がこの4年間学び形作ってきたことは、自分一人だけの知識にしてしまっているのだろうか」と疑問を持ち、「どうすればこの未来を知ることによって重要な位置を占める歴史を他の人に知ってもらえるか」と、考えたときに、この教職大学院で教員の勉強がしたいと考え、こちらに進学しました。

私は、学部時代には教職についての勉強をほとんど行わず、「自分の歴史観＝教育観」の形しか持っていませんでした。しかし入学してから早ひと月が経ち、週3回のインターン先での体験や毎週木曜日のカンファレンス、月一度の合同カンファレンスにおいて、指導教諭の先生や教職大学院の先輩たち、現場で学校を動かしている先生たちとの話し合いを経て「自分の歴史観と教育観は一緒に本当によいのだろうか」と疑問を

持つことになりました。今自分はこの感覚を非常に楽しんでます。というのもこれまでであれば、正解か不正解かの、ほぼ二者択一のようなことしかあ



りませんでした。この教職大学院での学びは「自分はこう考える。しかし、先輩が言うような考え方もある。どっちとも明らかに間違っているわけではない。ではこれからの教育にはどのような考えをもたなければならないのか。」と、決して正解じゃないからその考えはいらぬものと割り切れるものではなく常に自分の考えを意識し、周りの人がどういう視点でそういう考えに至るか、それを生徒たちにどう還元するか、生徒たちにどうなってほしいか、というように様々な思索を巡らせ考えを深めていく、そして自分に「教員になった時にどうしたいか」が徐々に見えてくる(まだ全然見えてきていませんが)。そういう学びがこの教職大学院での学びではないかと考えています。

現在のインターンシップ先である丸岡南中学校は、先ほど述べたように画期的かつ新鮮な取り組みを行っています。自分もインターンシップをさせて頂いてひと月が経ち、学校の仕組み、環境にはだいぶ慣れてはきましたが、それはようやくスタートラインに立ったというだけに過ぎないことを深く感じています。このひと月の体験で、教師が学習指導だけでなく、生徒指導、生活指導、進路指導等といった多くの仕事をこなさなければならず、しかもそのそれぞれが生徒たちの成長に欠かすことの出来ないものであると考えたとき、自分はまだまだ学ばなければいけないことが沢山ある、そう感じました。

これから2年間、「考えの硬いやつ」とお思いになることも多々あるとは思いますが、子どものこと、生徒のことを第一に考え、教育を担う人間の一人としての自覚を持ち、先生、先輩方から多くのことを学び、吸収していきたいと考えています。どうぞ宜しくお願いします。

平成24年度 福井大学教員免許状更新講習について

福井大学教職大学院 津田 由起枝

平成20年度より予備講習としてスタートした福井大学教員免許状更新講習も本格実施から早4年目、年を追うごとに、より充実した安定した講習が進められるようになってきました。「教師への敬意」を最大のコンセプトに、「新

しい時代をひらく教師の実践コミュニティ実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る」をテーマとして、専門職として探究し合う新しい方法を取り入れた講習を継続しています。

必修講習と選択講習の2つで構成されていますが、ここでは必修講習を中心として簡単に説明させていただきます。必修講習のプログラムの特徴としては、次の3点が挙げられます。

- ①必修12時間に選択6時間を加えて18時間（連続3日間）の講習を提供していること
- ②教職大学院のノウハウを活かして、「省察型」の講習にしたこと
- ③少人数による話し合いを基本とし、そのグループ編成は校種や年齢、教科等の壁を解いたこと

具体的には、1日目は、「3つの種」と呼ばれる教員自身が作成するレポートの紹介から始まります。実践の経験を交流し、これからの教育をともに考え合うために、グループのメンバーが語り合い・聴き合いを行うものです。その後、同じくグループで、「事例研究Ⅰ」として優れた実践事例の資料からその展開の筋道をたどり、意味を考え合っていきます。2日目は、「事例研究Ⅱ」として1日目の事例について考えた内容を各自レポートにまとめ、その後、グループのメンバーを変えてクロスセッションとして、作成したレポートの報告会を行います。3日目は、自身の歩みを確かめ、展望を拓くことを目的に、自身の実践レポートを作成し、クロスセッションで互いの歩みを聴き取り、その意味を探ります。

なお、講習の詳細については以下の通りです。

1 講習名

教育実践と教育改革Ⅰ（教育の最新事情）・・・必修講習部分（2日間）

教育実践と教育改革Ⅱ（教育実践の省察と展望）・・・選択講習部分（1日間）

2 日程および会場

（3日間とも9：00～16：45 各回とも上段が必修講習部分で下段が選択講習部分）

①平成24年 7月25日（水）～7月26日（木）

平成24年 7月27日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス総合研究棟Ⅰ 13階大会議室

②平成24年 8月 1日（水）～8月 2日（木）

平成24年 8月 3日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス総合研究棟Ⅰ 13階大会議室

③平成24年 8月 8日（水）～8月 9日（木）

平成24年 8月10日（金） 3日間とも 敦賀市プラザ萬象

④平成24年 8月22日（水）～8月23日（木）

平成24年 8月24日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス教育系1号館2階大1講義室

⑤平成24年 8月27日（月）～8月28日（火）

平成24年 8月29日（水） 3日間とも福井大学文京キャンパス教育系1号館2階大1講義室

⑥平成24年12月25日（火）～12月26日（水）

平成24年12月27日（木） 3日間とも福井大学文京キャンパス教育系1号館2階大1講義室

3 対象の職種

教諭および養護教諭

書評

菊地 栄治

『希望をつむぐ高校－生徒の現実と向き合う学校改革－』

(岩波書店, 2012年)

「本書を手に取り、頁をめくっていきたびにうち寄せるこの感動を、私がどれだけ書評の中で伝えられるのだろうか」、このような思いを抱きながら、私は本書を読み進め、本書の〈世界〉に没頭していった。

本書は、大阪府の2つの公立高校：松原高校と布施北高校の学校づくり物語と、同校に16年間という長期に渡って係わり寄り添い続けてきた早稲田大学教育・総合科学学術院教授の菊地栄治氏による鋭い学校分析・社会分析とが見事に織りなされ、つむがれた名著である。高校教育に対する学術研究の少なさからも本書は稀有な研究事例であり、さらに、本書で体系的に論じられる松原高校と布施北高校の取組と実践は、これからの高校教育改革が進むべき道を照らす重要指標と言える。

菊地氏が本書の中で紹介するように、松原高校と布施北高校は、両校共に「しんどい生徒」が多く在籍する「しんどい高校」である。被差別部落、経済的困難といった「しんどさ」を抱える地域で、同校教師たちは、生徒の現実と真摯に向き合い、生徒が抱える困難を入念に分析し、理解しようと努めていく。そして、生徒が他者との係わりを通して自己実現に向かっていけるよう、支え、援け、「エンパワーメント」し続けていく。また、同校では学校や教師のみが生徒を支えていくわけではない。学校や教師が地域の人々、保護者と協働し、行政をも巻き込んで、生徒の生活を、想いを、情動を支えていく。例えば、松原高校では「障碍」をもった生徒を「準高生」として学校に迎えることに成功し、そこで「障碍」をもった生徒と、経済的・地域的困難を抱える生徒たちとの交流が生まれる。この交流が、生徒たちの中に他者を信頼し、助け合い、係わり合う「絆」を芽吹かせていく。本書で示される生徒たちの声と語り、息吹く温かさ、瑞々しさは、読者の心の琴線に必ずや触れることだろう。

私は大学院在学時から、菊地氏の教育臨床社会学の演習を毎年受講し、菊地氏の教育改革調査研究をお手伝いしたこともあった。つまり、私は菊地氏から教育

研究に関して実に多くのことを学ばせていただけてきたのである。ある日の演習で、菊地氏が質問紙調査のデータを、分析過程を示してくださり、「若者の言葉や回答を見ると、若者の〈希望〉がすごく、色々なところで落ち込んでいるんだよ」と教

えてくださった。そのときのデータと分析が、本書の中で〈希望劣化社会〉と概念化され、さらに、〈希望劣化社会〉を克服していく2つの高校の物語が綴られていた。このことが、私自身にとっては感慨深いことでもあった。

本書は高校の先生方のみならず、小学校・中学校・特別支援学校の先生方、ならびに教育行政機関の方々にも、学校改革、教育改革に資する豊かな示唆を与えてくれる。是非、手に取っていただければと思う。最後に、菊地氏が本書の帯に寄せた読者へのメッセージを引用する。(福井大学教職大学院 木村 優)

本書は単純な成功物語ではありません。社会のいたらなさを引き受け、ひとというものの複雑さを深く認識しつつ、高校という場をより豊かにしていこうと奮闘する人々の記録です。そこには「異質な他者」と出会い、「自分を変えていくこと」をいとわない人々の生きざまがあります。それぞれの場所で希望をつむぐ人々へのエールになれば幸いです。(菊地栄治)



6/1 Fri. 9:00-16:30 第47回 教育研究集会

福井大学教育地域科学部附属中学校

学びを拓く《探究するコミュニティ》 (5年次)

— 3年間の子どもの学びを省察する —

本校では「探究」と「コミュニケーション」をキーワードとして、子どもも教師もが学び合う「探究するコミュニティ」の実現に向けた研究を進めてきました。さらにこの「探究するコミュニティ」の在り方を模索し、コミュニティによってより質の高い学校文化をはぐくんでいこうと実践し挑戦しています。第Ⅷ期研究主題「学びを拓く《探究するコミュニティ》」の最終年次として、「探究するコミュニティ」「ロングスパンの学び」「3年間をつなぐカリキュラム」の視点から子どもの学びを問い直し、協働で5年間を省察しています。つきましては、本研究集会に多数ご参集いただき、ご指導、ご助言を賜りますようにご案内申し上げます。

日 程

8:30	9:30	9:40	10:30	10:50	11:40	12:40	14:00	14:20	14:50	15:00	16:30
受付	オリエンテーション	移動	公開授業Ⅰ	休憩	公開授業Ⅱ	昼食	分科会	移動	全体会	休憩	シンポジウム

シンポジウム

子どもたちの探究を支える教師の探究とは

- 秋田 喜代美先生 (東京大学大学院 教授)
- 鹿毛 雅治先生 (慶応義塾大学教職課程センター 教授)

子どもたちの3年間の学びをつなげていくために、教師はどのような視点を持てばよいのか。私たちは、子どもたちがじっくりと探究学習に取り組めるような、3年間を見通したロングスパンの学びをデザインしています。本校の実践もふまえて、講師の先生方のご意見をうかがいながら教師の支援や協働研究の在り方について考えていきたいと思ひます。

申込方法

- 2011年5月28日(月)までに、申込用紙を郵送またはファックスでお送りください。(申込方法や交通機関の詳細は、<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-j/>をご参照ください。)
- 会費は2000円です。
- 問い合わせ先

〒910-0015 福井市二の宮4-45-1

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会受付係

Tel: 0776-22-6985 Fax: 0776-22-6703

実践し 省察する コミュニティ

Communities of Practice and Reflection since 2001

6月ラウンドテーブル速報

*Fukui Round Tables Summer Sessions 2012
For Reflective Practice, Organizational Learning,
and Reflective Institutions
of Teacher Professional Development*

2012.6.23-24

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）他

福井大学教職大学院
教育学研究科教職開発専攻

6/23

Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合う
コミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2012

4つの領域ごとに、専門職としての実践力を培う学びをどう実現していくか、それぞれの職場・地域・大学での取り組みをふまえて語り合います。

session 0 会の進め方について

session 1 実践交流の広場 実践の広がりに出会う

session 2 四つの問題提起 方向性を探る

session 3 テーマ別の話し合い 問いを深める

zone A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

zone B 教師教育：教師教育改革のための協働組織の形成

zone C コミュニティ：学び合うコミュニティを培う

zone D 教科：教科を問い直す なぜ学ぶのか

6/24

Sun. 8:30-14:00

実践研究
福井ラウンドテーブル

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

実践記録を土台に、小グループで実践の歩みをじっくり語っていきます。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えること。語られる展開に耳を傾け、活動の場を共有し成長のプロセスを探っていきます。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になります。1つの報告に1時間から1時間20分程度です。（報告・話し合い含む）

参加申し込みの方法は、福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。受付は、ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項を記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は、6月10日から20日を予定しています。あわせて、6月24日のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。申込の際にお知らせください。

Schedule

5/19 sat 5月合同カンファレンス

6/23sat シンポジウム

5/26 sat

6/24 sun

5月合同カンファレンス（予備日）

ラウンドテーブル

[編集後記]

五月の空が気持ちよく晴れわたる季節となりました。今年度からスタッフとなった私も、1か月を過ぎて少しか、心のモヤモヤの隙間から青空が垣間見られるようになりました。初めて参加した4月の合同カンファレンス。いろんな生活史を持つ人たちが互いに聴き語り合う場に立ちあい、いつの間にか時間を忘れ重なる声のなかに浸っている自分がいました。このおもしろさをいつまでも追求していきたいと思いました。これからがとても楽しみです。（山口）

教職大学院Newsletter No.43

2012.5.19発行

2012.5.19印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtkfukui@yahoo.co.jp

